The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	精神分析と科学、医学 : 臨床的見地から
Author(s)	大寿堂, 真
Citation	臨床哲学. 2007, 8, p. 19-33
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/5636
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

精神分析と科学、医学—臨床的見地から

太寿堂　真

はじめに

フロイトは、あるいは精神分析は、はたして科学か、あるいは科学的な見地に立つ精神医学と両立しうるものであろうか？周知のようにポパーは、精神分析は反証不可能だとして端的に否といった。これに対しアイゼンクは、フロイトの言説は反証可能性をもつものであり，科学としての資格を要求しうるものではあるが、実験、観察によって反証されてしまうものであるとして、その要求を退けた。[(1)]

一方、精神分析の側では、ラカンが、精神分析の営みには，つねに転移・逆転移の関係が付きまとい、被分析者の症候、就中、特定の症候を維持しようとする欲望に、分析者自身の欲望が不可分にかかわるという「精神分析の経験」から、精神分析は科学ではないとした。　科学は観察対象と観察者を区別し、観察対象を何らかの意味で観察者自身の振る舞いから相対的に独立に実在するものという前提の下に営まれるものであるのに対し、精神分析は転移関係という濃密な間主観的相互作用の中以外では営まれえない以上、両者は質的に異なるだと。[(2)]

ラカンの議論は、なるほど傾聴に値しよう。こうした示唆は、確実に、精神分析に自己反省的な側面を付与したといえよう。だが、そのラカンの議論から、人体の生-化学的、生理学的、解剖学的見地に立つ最新の医学-薬理学的知識と治療法に対する無関心、それどころか、精神分析はドクマであると確信犯的に主張する議論が登場しているのだとしたら、どうであろうか[(3)]。これは、知を「独断のまどろみ」から目覚めさせ、批判に耐えるものとして鍛えなおそうとする哲学の見地からみても、また、実際に精神疾患を患う人を前にして、その人々の病の治癒に向けて、患者との共同作業に当たろうとする精神医、あるいは療法家の人々の見地からしても，はなはだ不毛な結果を招かざるをえまい。

そもそもフロイトが直面した問題状況を振り返ってみよう。十九世紀から二十世紀にかけての時代にあって、精神医学はもっぱら精神疾患を脳の器質障害ととらえ、脳神経系の解剖と顕微鏡による観察に重点をおいて研究を進めていた。しかし、当時の観察器具の性

能は水準が低く、また、研究者は臨床的治療にほとんど熱意を抱いていなかった。一方、アサイラムと呼ばれる収容施設には、精神病者も、また、今日なら不安障害、気分障害、身体表現性障害と診断される、心-身両面の不調から来る症状を呈する人々もあまた起居していたが、近代医療とはほど遠い扱いをうけていた。基礎医学と臨床のこうした乖離状態の中で、近代医療の薫陶を受けて、なおかつその治療に積極的に当たろうとする「臨床医」たらんとする人の立場からすれば、当然、その方法や診断基準を、たとえ暫定的にせよ定めるためのモデルが必要であった。それをはじめたクレペリンやブロイラーに続く世代にフロイトの精神分析があったわけだ。今日、そのモデルの多くに問題があるからといって、それを直ちに「擬似科学」として切り捨てたり、逆に何らかの科学的見地とも無縁な「ドグマ」であると居直ったりするのは、そもそも精神分析が出発した時の状況からしても、妥当ではないと言えるのではないだろうか。他方、精神疾患の機序が全く解明されたとは到底言い難い今日、尚、フロイトが試行錯誤したプロセスは、別の姿にせよ、継続して進められているのではあるまいか。

本稿では、以上のような認識に立ち、まず第一章でフロイトの精神分析の基礎概念の学問的特徴づけを再考し、その位置づけを見定めたい。次に第二章では、当時の精神医学とフロイトの関わり、およびフロイトの基礎概念たる「エディプス・コンプレックス」の問題について触れる。第三章では、精神分析と当時の進化生物学との関係についてふれ、精神分析の限界と可能性について試論する。フロイトは精神分析があくまで「生命科学—生理学」的見地に立っているという確信のもとに、その試みを正当なものと看做したのであった。最後に、むすびで今日的見地から、フロイトの直面した臨床的課題について私見をまとめることにしたい。

第一章　精神分析の仮説としての位置

フロイトによれば、精神分析の基礎概念は、特定の抽象的な理念を前提として構築される。しかも、それは、精神分析を含めた経験心理学に限定されるものではなく、科学一般にあてはまることとされている。いわゆるメタ・サイコロジー諸論文の初期を飾る重要論文『欲動と欲動運命』（1915 年）では、次のように述べられている。

「科学の営みの正当な端緒は、現象を記述し、さらにそれを類別し、整序し、関係づけることにある。ただし、記述するに先立って、特定の抽象的な諸理念を資料に適用するとい

うことは、これをどうしても避けることはできない。そして、この抽象的な諸理念をもたらすものは、新たな経験のみに限らない」。[(4)]

ここでは、科学はまず現象を記述することから出発しなければならないが、その際には特定の抽象的な理念が前提となり、それに従って、はじめて何らかの記述が可能であることが強調されている。その際、如実にうかがえるのは、純粋な観察や実験の結果から、はじめて仮説形成が出発するという素朴経験論的な見方が、明確に排されていることである。ここで「抽象的理念」とよばれているものは、モデル化という言葉に置き換え可能であると考え、以降、モデル化と表記する。[(5)] さて、一般に科学の営みが、現象を記述するに先立って何らかのモデル化を前提にし、かつ、これを資料に適用する作業からはじめなければならない、というこのテーゼは、例えばガリレオが、「真空」という理想化された状態を想定して、等速度，等加速度運動を初めて定量的、数理的に記述しえたように、実際の科学史に照らしても妥当な見解であろう。

次に、フロイトは、以下のことを指摘する。即ち、初めに前提となっていたモデルは、材料を集めこれを整序してゆくにつれて、より確定的なものとなっていくこと、それ故、モデルはつねに資料を参照した上で練り上げられなければならないことである。かくて彼はこう述べる。

「これら（抽象的理念－筆者）は厳密に見れば、規約（konventionen）という性質をもつ、ただしそこで重要なのは、こうした抽象的理念が恣意的に選ばれたものではなく、あくまで経験的な資料との有意義な関係によって規定されていること、また、その有意義な関係であるが、それを認識したり、証明したりすることができるまでは、それが何であるかを言い当てることは慎んだほうがよい」。[(6)]

ここには、明らかに一種の解釈学的循環が見られる。すなわち、モデルは、あくまで経験的資料との「有意義な関係」に裏付けられなければならない。ただし、それが有意義であるかどうかを見定める基準は先行的に与えられているものではなく、あくまで資料を整序し、モデルがより確定的になるまでは、有意義であるか否かを論ずることはできない、という循環である。[(7)] その循環について論ずるより前に確認しておかなくてはならないのは、こうした問題提起が、経験科学における仮説というものの科学哲学的位置づけ、さらに仮説形成に先立って現象を記述する際に先行的に働くモデルが、いかなる性格を持つものか、またそのモデルは、対象との関係でいかにして正当化されるのか、といった認識論的な問題にかかわる、ということだ。

その際、フロイトが、モデルの性格を規約（konventionen）と呼んでいるのは、この問題を扱う上で重要な鍵を与えてくれているといえるだろう。小林道夫氏が既に示唆されていることだが、フロイトが科学的探究を行っていた十九世紀末から二十世紀初頭にかけての時代にあって、科学的基礎概念は規約なのか、それとも実在に対応するのかという問題が論じられ、それは規約であるとする考え方の代表者としてアンリ・ポワンカレの名があげられよう。[8] この時代、非ユークリッド幾何学の台頭、さらにマイケルソンによるエーテル仮説を前提とした実験の結果によって、いきおい絶対空間の概念の限界を指摘する声もあがるなど、ニュートン力学体系の前提にほころびが見え始めていたなか、ポアンカレは、物理学の基礎概念である「力」の概念を実験によって確証されたものではなく、むしろ実験科学を可能にする規約とみなした。ポワンカレは述べる。

「ニュートンの第三法則（すなわち、作用と反作用は相等しいという法則）を再考するならば、それは実験的な法則ではなく、むしろ一つの定義であると、改めてとらえ直さなければならない」。[9]

これは極めて大胆な表現である。というのも、作用・反作用の同等は、一般相対性理論までふくめた古典力学において妥当とみなされる運動量保存則・エネルギー保存則を導き出すうえでも大前提とされるからである。

ともあれ、ポアンカレは、ニュートンの第三法則のような力学の基礎命題は、古典力学の公理系の中で定義により真な命題なのであって、別の規約に基づく別の公理系のもとでは別様に規定することも可能であると、示唆するのである。

一方、フロイトは『ナルシシズムの導入』（1914 年）の中で次のように述べる。

「このような（科学の基本－筆者）理念は、全てがそのもとに依拠するような科学の基礎では決してない。科学の基礎はむしろ専ら観察にある。従って、科学の基本理念は不可侵のものでなく（当の科学的仮説という—筆者）建物全体の最上位にあるものなのであって、いかなる損害をもたらすこともなく、変更したり、削除したりすることができよう。我々はそのようなことを同時代の物理学において体験している。その物質、重心、引力等々についての根本的な見方は、精神分析における基本概念の根本的な見方と同様、憂慮されもしうるものなのである」。[10]

ここで我々は、理論物理学と経験心理学とを比べ、理論物理学の基礎概念と精神分析の基礎概念のどちらが揺らぎやすいかを問題にするまでもなかろう。むしろ注目すべきなのは、ポワンカレやマッハが同時代にあって指摘していた理論物理学の根本概念の揺らぎ易

さを、フロイトも同様に受けとめていたこと、またこれもポワンカレ同様、科学のモデルをつくる際の基本命題を規約的なものと看做し、従って別の公理系のもとでは現象は別様に観察され、記述されうるものとしていたことである。こうした見地にたって、フロイトはあくまで暫定的なものとして、精神分析の基本概念（例えば、神経興奮を呼び起こす刺激のうち、「内因性の刺激」としてとらえられた「欲動」の概念）を仮説的に提起したのである。

以上のような科学論をもとに、フロイトは精神分析の根本理念についてこう述べている。「当該の現象領域について、より丹念な研究がなされてはじめて、その領域に関する科学の根本概念も、より明確に理解されることができようし、それが進むにつれて根本概念もまた修正され、広範な領域に使用可能で、しかも無矛盾的なものとされることができよう。また、その時に根本概念を定義することもできるだろう」。[(11)]

では実際にはどうだったのか。フロイトの精神分析の最重要な概念として、「エディプス・コンプレックス」概念があることは周知のことであろう。それを論じた『エディプス・コンプレックスの解消』という論文で、フロイトはこう述べている。

「私はこの類型（エディプス・コンプレックス；去勢の脅し、超自我形成、潜伏期の到来といった一連の出来事についてのフロイトの仮説）が唯一可能な類型である、と主張するつもりはない。時間が経過し、これらの出来事の結びつきに関して修正してゆくこと、そのことが個人の発達に関して、きわめて有意義なものをもたらすであろう」。[(12)]

つまり、フロイトは自説の中核をなすエディプス・コンプレックス概念に関しても、公式には、あくまでも修正可能なもの、と見ていたわけである。

第二章　フロイト精神分析と同時代の精神医学

フロイトが精神分析を創始した時代、十九世紀から二十世紀初めにかけての精神医学界では、特にドイツにおいて、脳神経科学からのアプローチが重視され、フロイトもはじめはこのコースを歩んでいた。しかし彼は『精神分析への諸抵抗』（1925 年）と題する論文で、このアプローチが当時の臨床的見地から見て、満足できるものではなかったとし、その理由を述べている。

「神経症を患う人々を臨床的に考察してみると、彼らは中毒に近い状態、または、バセドウ氏病から来る苦痛に近い状態にあるとみなさざるをえない。それは体内で合成される

ものであれ、または体外から摂取されるものであれ、いずれにせよ、特定の非常に効力の高い物質が過剰であるか、あるいは、それらが相対的に欠如しているために生じる現象である。すなわち体内の化学的機序に異変を生じさせたり、中毒に陥らせたりする状態である。ところで、神経症に関わるとみられる何らかの物質、あるいは仮説に基づくものであれ、そのようにふるまう物質を、それだけを分離して明示するならば、その発見物は異論なく医師たちの配慮するところになることだろう。しかし当面は、その発見に至る道はいまだつけられていない。であるならば、われわれはまず、神経症の諸候像、例えばヒステリーの場合であれば、身体的失調と心の失調とが組み合わさって生じる症候像からしか出発することはできまい」。[13]

以上の文からフロイトは、いわゆる神経症（気分障害，不安障害，身体表現障害）は体内の化学物質の作用機序と関係していると想定していた。しかし、当時の医学の水準では，その物質を特定できる状況にはなかった。他方、臨床的見地からすれば、症候を記述し、分析し、診断することができるような、何らかの仮説的なモデルが必要であった。という事情がみてとれる。そこで精神分析は、症状と日々の患者の生活史を考察して、症状とその経過を入念に記述し、さらにはその要因を解明するため、そうしたモデルを提供しようとした、という。だが、解剖によって病因である病原体を特定できないかぎり、病気とは認定しないという当時の医学界の方針に従う多くの医者、医学生たちからは、心理臨床にとって必要不可欠な抽象（モデル）は、実体である病原体との関係が不明なため受け入れがたく、そのため医学界の主流からの抵抗を受けた、というのである。ところで、ショーター『精神医学の歴史』によれば、このような臨床心理的見地から、モデルを提示し、症候を大別し、患者の生活史に即して記述し、それを集積し、さらにそれぞれの症状に病名をつけ、その診断基準を定めるという課題に直面し、初めてその作業にあたったのは、フロイトではない。そのような役割を果たしたのは、クレペリンとその高弟ブロイラーであった。[14]

とすれば、彼らの切り開いた臨床的アプローチの線上に、その一つのあり方として、フロイト流の精神分析の仮説があったということになる。ただし、ショーターのいうように、そうしたアプローチが原則として、それ以前の神経科学-生物学的アプローチと拮抗するとすれば、フロイトは、後者の見地を後年も維持し続けたという点で、独特の位置価をもっていたといえよう。次章で述べるように、彼の生物学に関する見解は、今日の生命科学の見地からはもとより、当時の進化生物学や遺伝学の水準に照らしても、大いに不十分なも

のであった。しかしながら、両者のつながりにこそ真実があるという確信を持ち、探求を続けたという点で、この貪欲な読書家の目配りの広さには驚嘆せざるを得ない。そして、神経科学、生命科学の見地を踏まえ、心理学のモデルを構築するという課題は、例えば、現代の認知科学のあり方をみても明らかなように、なお今日的な課題であり続けている。では、そうした見地から、フロイトが提示したモデルの方はどうであろうか。その代表的なものとして、「エディプス・コンプレックス」概念があることはすでに述べた。それを検討する前に、まず次の点を確認しておこう。

およそどのような科学的仮説も、医学的見地も、時代の制約を免れないという思想史の一般原則からすれば、たとえ今日の目から見て個々の誤りをどれほど指摘できようとも、以下のようなフロイトの指針そのものが誤りだったと断じることはできまい。すなわちまず、基礎として、生物学、遺伝学上の有望な仮説に準拠するとともに、他方、臨床的見地から、症候の記述と解明のためのモデルを作り、それに依拠して症例研究をつみ重ねる。そしてなによりも、基本的方向性として、この両者の架橋を課題とする。そのような指針である。

ショーターに従えば、フロイトはクレペリンやブロイラー由来の「神経症」「精神病」の大別からいうと、主として前者の事例を追い、モデルを開発した関係者の一人であった。またその療法は、それ以前に行われていたロボトミーや電気ショックなど、脳に著しい気質的ダメージを与える方法に比べ安全であったこともあり、二十世紀半ばにはアメリカをはじめ世界的な広がりを見せた。今日、治療法という見地から見て、精神分析の有効性がどれほど疑わしいにせよ、このような方向性が治療法の軸を変えるのに大いに貢献した点は、尚認められてよいと思われる。

では、「エディプス・コンプレックス」概念の検討に移ろう。フロイトは、その経過について『エディプス・コンプレックスの解消』（1924 年）という論文で、次のように述べている。

「ファルス的段階（従来の定訳では男根期）、それはエディプス・コンプレックスの段階であるが、それは、最終的な性器的な編成が成立するまで発達し続けるのではない。その前に沈静化し、潜伏期の間に消滅するのである。この段階はそれに反する出来事（男児ならば母親、女児ならば父親への恋慕の想念が、去勢脅迫や折檻などによって幻滅させられる事態—筆者）が典型的に、かつ規則的に反復することによって終局を迎えるのである。（中略）かくて、子供のファルス的な性器編成は、去勢脅迫のために崩れ去る、という主張が

成り立つ。もちろん、去勢するそとおどされたら、直ちにファルス的な編成が崩れ去るというわけではない。（中略）自分がペニスを持っていることを誇る男児といえども、いずれは女児の性器を目にするだろうし、そうなれば、女児にはペニスがないことを確信せざるをえないだろう。このようにして、ようやく自分がペニスを失うことを想像できるようになり、ここで去勢脅迫は、事後的に効果を発するに至るわけである」。[15]

ここでは、散々語りつくされたフロイトのジェンダー・バイアスの問題については触れない。問題は、幼児期の児童に自分の性器に触れることからくる興奮がある、という仮定、そのため、児童が自慰する習慣が一般的である、という仮定、さらに、これを禁止する「去勢の脅し」が事後的に効果を及ぼし、それによってエディプス的な想念は解消し、そのことが、その後の児童の発達と社会化に決定的な意味を持つという仮定、さらに、以上のような経過を経ず、エディプス的な想念が未解消なまま残ることが、神経症の発症の要因となるという仮定は、いずれも何の統計学的な裏付けもなく、まず真っ先にその点で一般的なモデルとなりうるような資格を持ち得ないということ、この点のみを指摘するにとどめよう。[16]

ただ、その後の精神分析の歴史において、この「エディプス」のモデルが半ば神話的な役割を示したにせよ、前章で指摘したように、フロイト自身は、それを「修正可能なもの」と看做していた点を重視しておきたい。この点で、彼自身の見解は、ドクマ化の危険に対して、そのモデルの適用基準に何らかの制約を設ける必要性を求める批判的見地と、矛盾なく両立しうるものであるということを、併せて指摘しておこう。

第三章　基礎としての生命科学—臨床のモデル作り

日高敏孝氏が最近提起しておられる『遺伝プログラム』概念を、かりに、ヒトを構成する全遺伝情報（今日でいうヒトゲノム）は人体の設計図であるというよりも、むしろ環境との関係において順次、具体化（発現）されるか、あるいは、されないかする『式次第』である、と言い換えるとして、フロイトもほぼ同様な文脈で「プログラム」という用語を用いていたと言えば、多くの方が驚かれるかもしれない。[17] しかしながら、これは事実である。

「（エディプス・コンプレックスについて）一つの見方がある。エディプス・コンプレックスが終了せざるをえないのは、ちょうど乳歯が抜け落ちて、永久歯が生えてくるように、

エディプス・コンプレックスもその時期が来れば、おのずと消え去ってしまうものだからだ、との考えである。エディプス・コンプレックスは、なるほど個人的に経験するものだけれども、そもそもは遺伝により定まったものであって、事前に決定されている次の発達段階が到来するときには、プログラムどおりに消え去ることが予定されているもの、（中略）というわけだ。（中略）個体発生的な見地は、広い射程を持つ系統発生の見地と両立する。いかなる個体も、誕生すればいずれ死ぬように定められているのだし、おそらく個体の備え持つ身体器官の本性には、何が死因となるのかも予定されているであろう。たとえそうだとしても、次のことはなお関心事であり続けるだろう。すなわち、各個体が備えているそうしたプログラムは、どのように発現するのか（中略）を究明することである」。[18]

まだ遺伝因子たるD.N.Aの細胞内での正確な場所が特定されてもいず、ましてその生化学的素性も、発現にいたる経緯も、正確なところは闇に包まれていた時代にあって、そもそも「プログラム」とは何を指していたのか、この点については、生命科学史において究明されるに値することである。ここでただ一つ言えることは、こうした見地に立つ視座からのみ、精神分析の用いるべき一般的モデル（この場合にはエディプス・コンプレックス）は正当化されうるとフロイトが考えていたことである。そこでの着目点は、個体発生と系統発生との関係をどうとらえるか、であった。フロイトは、1924年3月26日のシャーンドル・フェレンツィ宛の書簡のなかで、当時、エディプス・コンプレックス概念の前提をゆるがすものとしてフロイト周辺の人々の間で議論されていたオットー・ランクの「出産外傷」説に対して、自らの意見をのべている。その際、フロイトは、フェレンツィがフロイトのエディプス仮説は「生物—生理学的基礎」に立つものである、と指摘したのを踏まえ、次のように述べている。

「私はランクのドクトリンを、特殊ケース、すなわちエディプス・コンプレックスの解消に即して吟味しました。その結果、彼のドクトリンが不十分なものであると思い至りました。あなたもご存じのように、ランクは、出産外傷を完全に個人的なものとして、また完全に個体発生的に理解しています。彼は総じて、ありうべき系統発生的な側面を度外視しようと努めています。わたしが異議を唱えるのは、まさにこの点に関してなのです。出産外傷が、個体発生のみならず、系統発生的に作用するとするならば、その場合にのみ、ランクはあなた（フェレンツィ）のジェニタリティの理論と接合することができるでしょう」。[19]（『フロイト‐フェレンツィ往復書簡』より）

そして、自らの主張するエディプス・コンプレックス説は、この「個体発生のみならず、

系統発生的に作用する」という要件を満たすもの、としたのであった。

個体発生と系統派生という座標軸そのものは、当時の進化生物学において盛んに論じられていた問題である。それは端的にいえば、つぎのような問い、すなわち、エルンスト・ヘッケルのいわゆる生物発生原則の核をなす問いに対応するものに他ならない。

「単純な生物はいかにして発生し、そこから他の、より完成された有機体が徐々に発達したのだろうか」[(20)]

この問いは、単純な生物（原形質）から、より複雑な生物が進化する、という、ラマルク、さらにはダーウィンの進化生物学に基づいて、一連の進化過程をある系統に属する個体の発生過程のなかに見届けよう、という構想から発せられた問いであり、系統発生とは即ち、より単純な生物種からより複雑な生物種が発生することを指すものであった。
そして系統発生は、「生理学的な過程であり、生物が持つ生理的な機能と同様に、構造的な原因によって、絶対的に必然的に決定される。その原因とは、有機物を構成する原子の運動である」。[(21)]

この視点に基づいて遺伝学的アプローチを行った人物に、アウグスト・ヴァイスマンがいる。フロイトは、『快原則の彼岸』においてヴァイスマンを参照し、そこからいわゆる「生の欲動」と「死の欲動」の概念を構築した。[(22)] 進化生物学者－遺伝学者ヴァイスマンは、ヘッケルの提唱した系統発生と個体発生との密接な連関を探求するという問題を受け、生殖細胞質連続体（KeimPlasma）説を提起した。それは、生殖細胞のなかに存在するとみなされる遺伝因子が、次世代以降に受け継がれるという仮説である。また、任意交配する育種生物をのぞいて、ある世代が用・不用の原則によって獲得した形質は遺伝せず、また遺伝的形質のうち、個体が生存するのに不利なものは、自然選択を通じていずれ消滅し、有利なものは次世代に残る、とした。これに対し、個体のソーマ、すなわち体細胞はすべて個体とともに死ぬ、と論じている。[(23)]

他方、フロイトは、系統発生という用語を、人類の進化史上の祖先から現在の人類にいたる過程に類推適用し、また、個体発生という用語を、人類もしくは民族集団のなかで誕生し発達する個人に類推適用した。その論拠を、彼は次のように述べる。

「こうした学説（エディプス・コンプレックス説）は、より内的な意味での生殖器官の成長の解剖学的差異により、確証される。この説によれば、ヒトは５年間で性的成熟をとげた或る動物種から派生した、と推測される。さらに、性生活の遅延とその開始期が二度あることは、ヒトへの進化の歴史と極めて緊密に関係しているのではないか、との念を抱

かせる」。[24]

ここでは、ヒトの進化史上の祖先として「５年間で性的成熟をとげた或る動物種」の存在が推定されている。そして、その形質が、自然選択に適応して現生人類に遺伝した、とフロイトはみなした、と想定することができるだろう。

そのかたわら、エディプス・コンプレックスが形成されるのに欠かせない要因として、次のようなことがあげられた。

「動物の本能的な生活に関して一般に説明が可能であるとするなら、それは、動物がその種の経験を誕生とともに自己の内部に持ち込んできたと、すなわち、その先祖の経験したことに関する記憶の想起をおのれの内部に保持し続けたというほかあるまい。人間という動物の場合も、事情は基本的には異ならないだろう」。[25]

ここでのキーワードは、ある個体が経験したことがらの記憶の、世代間にわたる保持である。そして、フロイトは、アトキンソンの提唱する原初の人類集団「原始ホルド」において、「原父殺し」があったと仮定し、その経験とその後の禁忌の記憶が「想起の痕跡」として保持され、個人の幼児期の心理において「エディプス・コンプレックス」としてそのつど反復され、世代から世代へと受け継がれる、と説くのである。

まず、生物学的基礎について。そのようなヒトの祖先が実在したかどうかは古生物学上の問題であるが、実在しなかった、と断定することはできないだろう。これに対し、「原父殺し」とその記憶の伝承に関しては、正当化するのは相当に困難であろう。なるほど、個人が過去に経験したことがらが「想起の痕跡」として保持され、当の個人の無意識のなかにその内容が刻み込まれる、ということはありえよう。しかしながら、人類の原初時代にあったことがらが、世代を超え、遠く離れた時代の個人の無意識のなかに、生得的にプログラムされていて、幼児期の心的発達においてそのつど反復される、と想定するには、記憶とその想起という脳神経系の構造と機能に関わる活動において、ある時代の諸個人が獲得した行動様式が、その後生まれた個体において、新たな学習をへずに、遺伝プログラムにおいて継承される、ということが前提となるからだ。これは、通常は、獲得形質の遺伝が可能であることを含意しよう。そして事実、フロイトは獲得形質の遺伝説に固執している。

「われわれのような類の議論は、現在の生物学の立場からするなら、もちろん困難になっている。というのも、獲得形質が次世代に遺伝されるということを、現在の生物学は何一つ知ろうとしないからだ。しかし、われわれの認めるところによれば、どれほど控えめに

見ても、生物の進化においてこうした要因を無視することはできまい」。[26]
フロイトの言うように、２０世紀には獲得形質の遺伝説は「困難に」なった。上記のように、19 世紀末の時点で、すでにヴァイスマンが獲得形質の遺伝を原則的に否定している。さらに 1910 年にモーガンが、遺伝因子を細胞核内の染色体上に特定して以降、メンデル流遺伝学の再発見と普及によって獲得形質の遺伝説は急速に衰えた。だが、もしかりに、生物学上、獲得形質の遺伝説に今後有力な根拠が与えられるとしても、あるいは、現に最近の金魚を用いた実験で知られているように、脳細胞の直接の移植によらずとも、脳以外の身体の器質において、記憶の機能と等価なものを確保することが可能であったとしても、記憶とその想起という脳神経科学上の構造と機能に関わる活動に、原父殺しとその禁忌という経験が重要な役割を占めた、というためには、まず事実問題として、そうした経験が過去の人類に共通の集団にあったということが確証されなければならず、さらに、それを禁忌する機能が遺伝プログラムのなかにあることが確証されなければならない。そして、すくなくとも、そうした禁忌を人類が遺伝的に継承することが、環境に適応するうえで有利である、といえるような論拠は、どこにも示されていないのである。
してみると、フロイトの基本概念のうちでも特に重要な一つであるエディプス仮説は、フロイトが求めていた生物学的根拠を獲得するにはあまりに大きな障害が立ちははだかっていることになる。また付言すれば、未証明の仮定をいくつも前提にしているという意味で、立論として論点先取の観はまぬがれない。
　しかし、そうだとしても、生命科学‐生理学の見地と、心理学の見地とが交差する地点こそ、精神医学の基礎‐臨床にまたがるモデルは成立しうる、というフロイトの基本的視座までが否定されるわけではないことも、また確かであろう。

むすび

　以上のように、フロイトは、心的障害の病像を臨床的に記述し、その要因を見定める、という必要から精神分析のモデルと基礎概念を構築した。さらに、その実体、すなわち神経伝達物質の特定とその振る舞いの解明に至る道がいまだ発見されていない段階の暫定的仮説としてそれを位置づけていた。実際のフロイトの提示したエディプス仮説は疑わしい点が多々あり、また、フロイトが確信していたような生物—生理学的基礎は到底、裏付けられているとはいいがたい。しかしながら、フロイトは、当の概念、およびその基礎とな

るモデルを修正、削除可能な規約とみていた以上、それをはずしても、また、その基礎となる「欲動」モデルをはずしても、なおその基本的着想は生きる、とみなすことができる。その着想とは、神経科学、進化生物学、生化学、分子遺伝学を基礎とした医学を土台とし、他方、臨床的な見地から何らかのモデルを構築して、それをもとに病像を観察、記述し、両者の接点にありうべき精神医療のあり方を模索する、という方向性である。

他方、今日の水準では、神経伝達物質の振る舞いと、特定の化学薬品の作用機序との関係は、一部は特定され、不安障害や気分障害に有効な薬物治療は開発された。ただし、例えば、睡眠の機序には不明な点も多く、また、精神疾患、精神病の要因にはまだ未解明なものが多い。遺伝との関係も、今後のゲノム解明に待つべきものが多い。さらには、脳—神経科学は、まさにこれからの発展が望まれる分野である。その意味で、基礎医学も今後の一層の展開が望まれ、また、臨床心理とも、協力関係はすでにあるものの、その連携はさらに深化される必要がある。以上の点で、フロイトが直面し、また解決を模索した課題は、その様相こそ異なれ、本質的には現代もまだ課題であり続けている、と考えるのは、ひとえに筆者のみにはとどまらないであろう。

（本稿を書くにあたり、多くの人のご意見を拝聴し、貴重な示唆をえた。特に、千葉大学、哲学専攻の柏端達也氏、下関市立大、宇宙物理学専攻の佐々木実氏、立命館大学独立研究科、生物学専攻の遠藤彰氏には、この場を借りて、感謝の意をお伝えしたい）。

（凡例）フロイトの著作から引用する場合には、Sigmund Freud　Gesammelte　Werke. Fischer Verlag 所収の各論文から引用することにし、これを G.W. と略記、巻号はローマ数字であらわし、その後、ページ数を表記する。

注

（1）アイゼンク『フロイト帝国に別れを告げよう』宮内勝、藤山直樹他訳、批評社、1998 年

（2）Lacan, *le seminaire*, livre XI.(1964), Edition du Seuil.1973. p. 13ff. なお、「逆転移」という現象のため、分析者は中立的ではありえない、との見解が療法家の世界で一般化したのは、1950 年代以降であり、ウィニコットを中心としたグループの仕事が大きいという。妙木浩之『精神分析における言葉の活用』金剛出版、2005 年参照。

（3）いうまでもなくスラヴォイ・ジジェク、およびそのエピゴーネンを指す。

（4）G.W. X. S. 210.

（5）この置き換えの典拠は、丸善の『科学大辞典』である。そこでは、モデル化は、「問題としている事象についてそのふるまいを調べ、それを生じさせる因果関係を明らかにするすることによってその事象を記述するモデルをつくることをいう。」とされ、さらに「モデルをつくることによって、実際には調べることが難しい事柄の模擬実験が可能となる」と指摘されている。『科学大辞典　第二版』丸善、平成十七年、p. 1495.

（6）G.W. X S.210.

（7）この循環の問題を含め、現代科学論の問題について、野家啓一「現代科学論とサイエンスウォーズ」で示された見方に筆者はおおむね賛同する立場である。野家啓一、増補『科学の解釈学』所収、ちくま書房、2006 年

（8）小林道夫「物理学の哲学的諸問題」、『科学と哲学　論理・物理・心・言語』内井惣七、小林道夫編編　昭和堂　1988 年

（9）poincare, *La science et hypothese*. flamalion.1893. p.123.

一方、同時代において、エルンスト・マッハも、やはり規約主義的立場から、作用・反作用の同等、質量概念、絶対空間、絶対時間等の基礎概念の論理的破綻を指摘している。作用・反作用同等については、次のように批判する。

「あらゆる関係において完全に等しい二個の物体が互いに等しい物体が互いに向き合っているとする。その時われわれに熟知の対称性原理に従って、この二個の物体はその結合線の方向に等しく反対の加速度を与え合うであろうことが予想される。そこで、これらの物体が形態、化学的性質、などの何らかごくわずかの不等性を持つ場合には、形態や化学的性質が等しいことは問題ではないことを予め仮定するか、あるいは知っているかしないかぎり、対称性原理はわれわれのもとを去る」。『マッハ力学史』上、岩野秀明訳、ちくま学芸文庫、2006 年、p. 339.

（10）G.W. X.S.114. なお、マッハは、重心の概念について次のように評し、それを直観的に把握可能な形に鋳直す必要を示唆している。

「重心原理と面積原理のような原理を、ただその抽象的数学的形式において理解しようとし、その応用を明らかにすると同時にそれらの原理を導きさえもするような、よくわかる、単純な事実を無視すると、これらの原理の反面が理解されるにとどまり、理論の実例としての実際の現象を認識したことにはならない」。『マッハ力学史』下、岩野秀明訳、ちくま学芸文庫、2006 年、pp.61-62

（11）G.W. X. S. 210f.

（12）G.W. XIII S. 401.

（13）G.W. XIV. S. 228.

（14）ショーター『精神医学の歴史』ｐ 128 － 137、木村定訳、青土社、1999 年

(15) G.W. XIII. S397f. 妙木浩之『エディプス・コンプレッックス論争』によれば、エディプス仮説はもともとフロイトの自己分析に由来し、その最初の症例研究で有名な五歳児「ハンス」の場合、治療は失敗し、後年、訪れた「ハンス」は、フロイトの見解を否定したが、実際、これはフロイトの誤りによるものであった。妙木浩之『エディプス・コンプレクス論争』参照、講談社叢書メチエ、2002 年。なお、幼児期、児童期にも、身体的な快・不快に由来する経験があり、それが発達と何らかの関係がある、という「子供の性生活」というフロイトの着想自体は、幼児の性的虐待とトラウマとを考える意味でも、その価値をいまだ失っていない、と筆者は考える。

（16）日高敏隆『人間は遺伝か環境か？遺伝プログラム論』文春新書、2006 年

（17）G.W. XIII. S.395.

（18）その一例として、霊長類研究のアプローチから Machiavellian intelligence, I, II., oxford. また、脳の記憶メカニズムのアプローチから、苧阪直行編『脳とワーキングメモリ』京都大学出版会、2000 年

（19）*Correspondance*. Sigmund Freud-Sandor Ferenczi, Calmann-Levi., c1992. p135f.

（20）Haeckel, *Generelle Morphologie der Organismen.I*. Berlin,Georg Reimer Verlag.1866,S.168.

（21）Haeckel, *Generelle Morphologie der Organismen.II*, S.365.

（22）G.W. XIII S.48f.

（23）Weismann, On heredity,in*:Eessays upon kindred biologicalploblems*. oxford clarendon pres 1981-1982. p71.

（24）G.W. XVI S.180.

（25）G.W. XVI S.207.

（26）ebenda.